蒸し暑い。下田の海沿いで三日ほど過ごしていたので、なおさらそう感じる。潮騒の代わりに喧騒が、青空の眩しさの代わりにネオンが、海風の代わりに異臭が、ある。

嫌いではない。快適ではないけれど、快適な状況だけがすきなわけではない。清々しく爽快な潮風が絶えず拭いていた下田とは違って、粘り付き重苦しい空気が沈殿する新宿は、それはそれでよさがある。騒がしく眩く臭う。それらにもよさはある。静かな町にいたからわかる。

三丁目にすきなバーがある。その店にはよくと言うほどの頻度では行かない。その店には旅行帰りにだけ行くようにしていた。そうしてから……早八年になる。大学生の頃からの付き合いのある店だ。学生の頃は年に二十回以上は行っていた。今はいいとこ六か七回程度だ。

働くようになり忙しくなったというのもあるが、それを機に住む場所が変わったから、という方が理由として正しいかもしれない。

「ああ、稲谷さん、ひさしぶりだね」

月に何度も来るような常連さんもいる中で名前を覚えてもらえているのはバーテンとしてカウンター内に立つ奥菜さんと椎名さんの記憶力がいいからなのと、来るたびに旅行の写真を見せびらかすからだと思う。今回もまたそうした。

「金目鯛と鮑、食べてきました」

今日は椎名さんが休みで、奥菜さんだけがいた。どうやら暇していたようで、棚にしまい込んでいたグラスを拭いていた。

「良いもの食べてるねー、ここってあれっしょ、大学生の時にもよく言ってたとこ」

「そうですそうです」

「いいなー、俺も行きたいな」

「十周年とかのタイミングで一週間ぐらい休みとれないんですか？」

「うーん、どうだろう。なかなか休む勇気がねー」

休む勇気がない、というのは個人事業主だからだろう。それに、ここの賃料もなかなかに高すぎるという話もよく聞いている。だから、今回はおみやげを買ってきていた。

「おせんべい、好きでしたよね？」

「え？ うん」

「これ、キンメせんべいです。おみやげ」

リュックから取り出し、かわいらしい絵が描かれたそれを渡す。

「ええー!? いいの？ ありがとう」

「いえいえ、家でゆっくり食べてください」

うん、と答えながらおみやげをバックヤードにしまってから、注文を訊いてきた。

「今日はどうする？」

「レモンのフルーツカクテルを」

この店のフルーツカクテルはとてもとてもおいしい。